

幕末明治の写真師列伝 第五十回 内田九一 その十五

明治3年(1870)秋版、英蘭学立翁編の『東京諸先生高名方独案内』という版付には、「浅草代地、内田九一」と内田九一の名が記載されている。そして、明治3年(1870)2月14日開場の市村座第巻番目五立目浄瑠璃に、すでに写真師内田九一を題材にした『魁写真鏡俳優畫』(さきがけしゃしんのやくしゃえ)の演目(河竹黙阿弥筆、常磐津所作「写真の九一」)がある。市川権之助(九世市川團十郎)が主役の内田九一の役「写真鏡師古一」を演じた。また内田九一はこの九世市川團十郎も撮影している。さらに仮名垣魯文もこの明治3年(1870)に歌川豊国画『金花七変化三十一編』(日本カメラ博物館蔵)で写真術について言及しており、この序文で以下のように、

「金花七変化三十一編 序言 近来西洋蘭西国まで窮理發明せしと云。写真鏡の奇業。我神洲ふも伝習て。世の流行の第一たり。されば写真家の盛業なる。人の横山松三郎下谷實入の内田九一代地西に大金北庭筑波。互ふ競ふ手練の紙写。ガラスの焼けぬ曇れあれど。大顔れぬ日ハないかいなト聴取傍聞復写し。洋冊に似さる合巻の趣向へ狭加も流行の請売をして利得る為ぞ

庚午季秋 仮名垣魯文漫記

と、横山松三郎、北庭筑波と共に内田九一の名が記されている。

また、同じ『日本写真史年表』明治3年(1870)の項によると、蜷川小史(式胤)が内田九一及び横山松三郎と謀って『美術写真帖』を作るとあるが詳細は不明。

小川同窓會編『創立記念30年誌』(小川写真製版所、非売品、1913年)所収の「故江崎禮二翁略傳」によれば、明治3年(1870)のある日、小野崎藏男という樺太権参事の従者をして江崎禮二が、小野崎の供をして内田九一の写真館へ行ったことが書かれている。この時、小野崎は柳橋の芸妓を連れて、内田九一の写真館へ行っているのだが、江崎禮二はこの時の撮影の様子を食い入るように見つめて、益々、写真術の研究を志そうと決意を新たにしたいという。江崎禮二はこの翌年(1871)8月に小野崎の従者を辞めて、横浜へ行き下岡蓮枝の元に入門している。

学海日録研究会編『学海日録』第3巻(学海日録研究会、1992年)の明治3年(1870)3月25日と9月20日、明治4年(1871)2月13日の記述には、

「廿五日。母上横浜よりかへりきます。佐波一郎御供す。江の島・鎌倉・金沢を遊覧し給ひしよしなり。これは藤井喜太郎に命ぜし如くし給ひしなり。九一が写真所に至りて写させ給ひし御寿像を給はりぬ。よく似させ給ひぬ。」

「廿日。家兄とともに浅草の写真局におもむきて写真せしむ。内田九一といふもの也。唐律疏義十五巻をかふ。本藩森山朔之助、大学南校より召されて写字出仕となる。」

「十三日。やくをふみて朝とく汐留松本に至り、有竹・中野等と同舟し大垣の小野崎をとまひ内田九一の居におもむき、亀山の近藤と会し、五人直垂きたるかたちを写真せしむ。終りて各別に一図を作らしめたり。」

との記述がある。

この明治3年(1870)に、前述の大阪時代に内田九一の助手として感光剤塗布用のガラス板を磨かされていた土居通夫(土肥真一郎)(注1)が内田九一と会った記録が『土居通夫君伝』に

ある。それは明治になってこの土居が新政府に出仕し、明治3年(1870)7月に鉄道掛を仰せられて、同年(1870)8月24日に大阪から東京へ出張を命じられた時の「東京出張日記」である。この「東京出張日記」10月朔日の項に、

「十月朔日浅草代地の写真屋、内田九一を訪うて、久々に出逢ふ三年前の硝子磨きは今民部省の大官なりと聞き、九一は驚異の眼をみはりて暫し言葉もなかりしとなむ。」

という記述がある。

『土居通夫君伝』によると、土居通夫は慶応3年から慶応4年の鳥羽伏見の戦いまでを倒幕の志士として活躍し、新政府成立後の慶応4年1月そのまま大阪で宇和島藩への帰藩を許されて、宇和島藩在京都周旋方を命じられ、次いで1月22日に「外国事務局」に移され、五代才助の統括する大阪運上所に勤務することになった。そして明治2年(1869)1月に大阪府外国事務局掛、9月に大阪府権少参事に榮進し、翌明治3年(1870)6月には正七位に叙せられて鉄道掛となる。

このことから、土居通夫がここでいう「三年前の硝子磨きは今民部省の大官なり」というのは、慶応4年・明治元年(1868)頃のことの意味で述べていることとなる。そしておそらくこの明治3年(1870)に撮ったと思われる肖像写真が、後日、土居が神奈川県権知事兼外務大丞をしていた同郷の井関盛良(注2)に渡されて残っている。それが「写真集 近代日本を支えた人々」(東京都港区教育委員会)の、「119 大坂府権少参事 土肥通慶 辛未九月朔於東京写之(撮影 内田九一)」である。この頃、土居通夫は土肥真一郎通慶と称していた。但し、前記のことからこの「辛未九月朔於」というのは、おそらく「明治三年十月朔日」の間違ひであろう。

注1 土居通夫

1837-1917 明治・大正時代の実業家。

天保8年4月21日生まれ。伊予(いよ)(愛媛県)宇和島藩士の子。維新後、司法官をへて明治17年鴻池家の顧問となり財界に入る。以後大阪電灯、長崎電灯、京阪電鉄などの社長を歴任した。27年衆議院議員。28年大阪商業会議所会頭。大正6年9月9日死去。81歳。本姓は大塚。通称は保太郎、彦六。俳号は無腸(むちょう)。(上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』(講談社、2001年)より)

注2 井関盛良

1833-1890 幕末・明治時代の武士、官僚。

天保4年4月21日生まれ。伊予(愛媛県)宇和島藩士として他藩との交渉に活躍。明治3年神奈川県知事となり、「横浜毎日新聞」の発刊を推進した。4年宇和島県参事、名古屋県権令、7年島根県令。のち東京商法会議所議員、東京株式取引所頭取をつとめた。明治23年2月12日死去。58歳。初名は峰尾。字は公教。通称は斎右衛門。(上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』(講談社、2001年)より)

(森重和雄)